

TOSAギャラリー

となりの ニューヨーク

木戸孝子



The Ordinary #5
(Astoria, NY)



私のニューヨーク生活も五年目に入りました。最近よく、生まれ育った中村のことを思い出します。ホームシックというより、むしろ私の中で高知とニューヨークの距離が、どんどん近くなっている感じです。

仕事にこんな経験をしました。私が働いているスタジオは、二層ほどの大きな白黒写真をペライタ紙(美術品仕様印画紙)にプリントしています。コンピュータは一切使わず、すべて暗室作業です。私はスポットティングという仕事をしていきます。写真を引き伸ばす時にネガの上にある小さなゴミや傷は、出来上がったプリントに白く焼き込まれてしまいます。それを細い筆と専用のインクで、一つ一つ消していくのが、スポットティングという作業です。細かい

仕事なのでものすごく集中します。

ふと集中が途切れ、散歩に出ようかなと思いつき、外の風景を思い出しました。すると、スタジオのドアを開けて右に行き、角を曲がるとお父さんが中村で耕す田んぼがあって、左に行くと、具同小学校の校庭があるのです。あれ? しばらくの間があって、今ニューヨークにいるんだと気が付きました。自分がどこにいるのか、今が自分の人生のどの時点なのか、一瞬分からなくなりました。

遠くは近い

この町、モントークに行った時には、滞在した家の裏庭で「ハチク」を発見しました。子供たちから「タケノコ&イタズリ探りの名人」と、噂された私は、とにかく興奮しました。裏庭のハチクは、もちろん全部採

りました。皮をはいであく抜きしながら、一人の私がニューヨークと高知に同時に存在しているように感じました。アメリカ人の友だちは「タケノコはアメリカに原生してないはずだよ」と、言っていました。昔住んでいた人が植えたのでしょうか。とても不思議でした。

私たちが知っている時間や距離は、本当に正しいのでしょうか? 時々疑問に思います。どちらの単位も人間がつくったものです。そして私は、知らないうちに自分の知識に限界をつくられて、その範囲の中で物事を判断しています。でもちょっと見方を変えて宇宙を見ると、本当は心で測る現実の方が正しいのかもかもしれません。



きど たかこ 1970年、中村市(現四万十市)生まれ。フリーランスフォトグラファーとして、ムック本シネマキッズなどの仕事を経て、2002年渡米。ニューヨークのインターナショナル・センター・オブ・フォトグラフィーで学ぶ。ニューヨーク在住。

光と影、孤独と希望、永遠と一瞬、過去と現在と未来、高知とニューヨーク、生と死、正反対に思えるものは、時間と距離に関係なく、矛盾もなく、同時に存在しています。だから私は、ここからどこへでも行ける。どこからでも戻って来られる。会いたい時に会いたい人に会えるのです。その美しい世界の存在を確かめたくて、この作品を撮り続けているのかもかもしれません。

高知新聞(夕刊) 2007年4月12日

となりのニューヨーク ―遠くは近い―

私のニューヨーク生活も五年目に入りました。最近よく、生まれ育った中村のことを思います。ホームシックというより、むしろ私の中で高知とニューヨークの距離が、どんどん近くなっている感じです。

仕事中にこんな経験をしました。私が働いているスタジオは、ニメートルほどの大きな白黒写真をバライタ紙(美術品仕様印画紙)にプリントしています。コンピューターは一切使わず、すべて暗室作業です。私はスポッティングという仕事をしています。写真を引き伸す時に

ネ
ていくのが、スポッティングという作業です。細かい仕事なのでものすごく集中します。

ふと集中が途切れ、散歩に出ようかなと思い、外の風景を思いました。すると、スタジオのドアを開けて右に行き、角を曲がるとお父さんが中村で耕す田んぼがあって、左に行くと、具同小学校の校庭があるのです。あれ?しばらく間があって、今ニューヨークにいるんだと気がきました。自分がどこにいるのか、今が自分の人生のどの時点なのか、一瞬分からなくなりました。

去年の初夏に、マンハッタンの右側のロングアイランドの端っこの町、モントークに行った時には、滞在した家の裏庭で”ハチク”を発見しました。子供のころ、近所のおばあちゃんたちから「タケノコ&イタズリ採りの名人」と、噂された私は、とにかく興奮しました。裏庭のハチクは、もちろん全部採りました。皮をはいであく抜きしながら、一人の私がニューヨークと高知に同時に存在しているように感じました。アメリカ人の友達「タケノコはアメリカに原生してないはずだよ」と、言っていました。昔住んでいた人が植えたのでしょうか。とても不思議でした。

私たちが知っている時間や距離は、本当に正しいのでしょうか?時々疑問に思います。どちらの単位も人間がつくったものです。そして私は、知らないうちに自分の知識に限界をつくられて、その範囲の中で物事を判断しています。でもちょっと見方を変えて宇宙を見ると、本当は心で測る現実の方が正しいのかもしれない。

これは私の写真のテーマでもあります。題名の”The Ordinary Unseen”は、日本語にすると、”見えない日常”という感じです。いつもの毎日の平行線上に、心がすべての現実をつくり出していく世界が同時に広がっているように思います。そこでは、私の心だけが有効なものさしなので光と影、孤独と希望、永遠と一瞬、過去と現在と未来、高知とニューヨーク、生と死、正反対に思えるものは、時間と距離に関係なく、矛盾もなく、同時に存在しています。だから私は、そこからどこへでも行ける、どこからでも戻って来られる、会いたい時に会いたい人に会えるのです。その美しい世界の存在を確かめたくて、この作品を撮り続けているのかもしれない。